俳諧天爾波抄

六

へ 5
4422
6

門へ5
寄4422
巻6

昭和九年
九月二九日
購求

俳諧天保波扇巻之六

○十二身

○氏身

て

てくく。かるくてつぶるあり。てくくとつぶるるあり。てくくとつぶるる事をんなり。あくてぐ。逃てくゆくとつぶるる事をみゆくつぶてくるさまをいふなり。手をぐてと表けるる事。人の事をつやくるあらして。そのそくそくと。物をつもるく。あつう持などするゑゆゑなり

荒　なりあらくやぐるる。特毋外　芭蕉

この句なども。てのほうをおうてとつぶるる句なり。面白ふ言ふ

[illegible]
モナホサズトイフ心ナル（柿頭抄ニ番ニ・コレラノヤガテ
イトヨクオカレタリ・俗語ノヤガテニハアラザルナリ）　やがて　ハ・トリ
て片方ちるものとんのさらぬ時とうるもうるもの
さらす初しとゝのぶ

炭　栗を苅しわくひろき畠地　梨一
日　たくぶり拾ひあつめく墨ぬるぶ　柿園
日　なりよやく奮一羽年のくれ　智月
猿　時うすりて　ふひ寒さる秋　草蓬
荒　月もなくなくて　酒のむひとりぶ　日
日　まる柳ゝ　よもやまわく酒寺車ゐれ　素秋
日　七草をとらきたゞりて　ほるぶ　俊州
日　なるゝて　袖送りて　秋の夜　一井

続　ゆゝ　裸ぐ　却て　夜やまる　嵐蘭
日　五六十海老　書て　殺一つ　之道
荒　門ぬ　ゆゝ　ゆく　略一ト　蔚ひ　内習
続　きて　ぬく　帰て　ぬく　野の　胡及
炭　梅　ぬく　海なのくぶれ　ぬ　梨
荒　つ小て　ぬて　ぬゝ　ゆゝ　百家ぬ　一井
続　演　萩ゝ　筆（イセニテ）　ゆゝ　ぬて　年のくれ　呂丸
炭　ゆ　ゝ　の月　ぬ　ゆゝ　旅大工　俊く
日　魚　店や　ぬや　甚ゝ　ぬげて　冬の月　里东
猿　ゝ　ぶれ　ゆ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　九兆
炭　田の畔ゝ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　早蕨　把て　投ぬ　ぬ　然尼
猿　ぬ　ぬる　墨　俳　ぬ　ぬ　ぬ　史邦

炭　江戸のたたむらの女らのぢらして　芭蕉
コレハ上ヘカヘルテナリ。のりしれて居ったたたしる
ふりトイフ句意ナリ
員　雪しぐれ舟移りいづる書うけく　荷考
コレモ江戸ヘカヘス為ニオキタルテナリ
猿　まのりよ仕舞ふくかつる　蓬机　雲
せどの畑　茅ふきくみくまもしく寸　昌業
春　けしよりなりて魚のあとなきく　一井
員　ら来ぬあらかれて猫の立るなめ　出来
猿　潮まそよそ川金ふく魚の月　杉風
日　片隅に虫鳴うして芋代月　乙州
日　人よ家乙州が新宅ニテ　芭蕉
日　菜のうり墨ときさげうく寿出す　弧屋

日　箕よりして富ふちふく絵の屏　日
猿　張てかくもちみやて茶　枯　嵐雪
瓢　月ふちふく俳の内裏の司めく　沾徳
春　立て寄るわらしの舟月ふけく　夕支
炭　ちしくわて雨ふまて秋の風　梨本
徒　むちのて竹ふく新のやまふ　西吾
日　初雪ふよよくれて涼し瓜乃土　芭蕉
瓢　舟の小ふ春の痛ふくふふく　里東
猿　軽乃口雪をうふて義経ふ　芭蕉
員　月の高書をりちふ中ふ痛ふ　玖人
猿　て乃木戸や漬のふれくふ八月　宝角
日　常斎ふづれてふくもれ　子那

続　蕎りつけく拙を蕎り屋の馬　史邦
荒　るとしのかりかりて田を新に嫁る　桂宣
日　ぞりつやて笑をとる柳か　蕉
続　天蓬毛の紺布さりて毛の蕎　惟然
荒　ゆぶくて移のからめ蕎う船　蕉交
日　神子りて拓乃集蕎る毛の蕎　梅舌
続　苓る物やぬとげりて佛生世　乙州
日　よりに寝て絶るの蕎屋くを忘　文考
荒　きりつそれ門あるる元食ぶ　梅舌
続　言よりとぐれて里も麻時く　里圃
歌　見りもりけく言しを冬の月　我眉
日　上塗なりよ洗くおく壁　孤屋

日　ぶりきれくて蕎邦屋とり川　野坡
日　明もりぬ名抵何とり屋て　孤屋
日　箱こりつく鰐節ら冬　野坡
冬　拓れ冬めくねるう蕎のさる鳥拓　羽笠
○てれつりの冬ぶきりるあり
集　山りれ寝相の屋れ黄ぶるて　芭蕉
この句、蕎屋とりきみ後ぶて附りあぶ、ぶぶ〳〵〳〵つの
ひ拓るての字より
集　きりきうん再ぶ書拓てれ〳〵ぶ　芭蕉
日　徒芋やぶ花のさりを賣ゆて　日
日　きぶかゆやあれ神縄ぶりつる　日
これのての字ぶ上へつるんはうれるより

○てんとうしてみて。すぐてくにぐるてくあり。潤るを例みておす
ひく。かつあるてくを文かくあると。いてるびを外の事れかくく
できまくるを例みて羽かり。つてとるむを仕る羽也。かの輕丸が
手ほ輕高をを「わられけるとかる所。宮家を「引うをてくを事
ゑもひを。大うを「引をを仕る羽るかぐより

炭　すりくをを「やををしぐれする軒　野枝
稼　押合くを痛てくをまを「引うを稼　芭蕉
日　草高ををまぐをくあてい歩破り　日
黙　をてぐをかをを「をを敷なをを　路通
受　かうを事りをぐりうををそを事受び　嵐雪
炭　雞頭みをくを。まを鼻「なを　野坡

ふをのかを。てをといをくをの例なをを白あり

炭　らうあをかをくを多をき　精進日　魯良
うをく。てをををなどをのをなどのかなりとをるぐ。にぐるてをを。
事をを八「神ををうをてをををくばを「世ををををにすぐるてをををを
をり。ををを。タラバをををほをを。をんを

○甚外てをてをを「てをを「てきてをを「てをを「てをを「
てをなどををををり

負　かををををを深ををあををいをひををき　一井
苦　あをををを世ををひをを業をひををを　芭蕉
日　冷汁を　苦をあををををを　切及

○てをとをうを事「をををあり。「をを上ををををを「をを洗て
とをとをの間「切をををを「をを」ををををを「たををを
「ををををををとをを「ををををををを「ををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭　秋のそらしぐれ　秋の月　其角

猿蓑　ものの壁　狐狸　芭蕉

いづまとよつよいへるごとく。てのうちの物ばかりぞ。

みるべし。たとへば。はゐ住菴記の「ものぐさ」とつく。狐

狸ものとうとく侵ものとなりぬ

○このかるたんたるべくこそあれやあしなどの。

こうくつはいかに。これぐらいとうとう。前につづくこの字

俳の字なるべし。いろいろ。ものとかくるべく。

くく何とかいふ何とかいふ。けあよ何にテアルソノ何

とかいふみるべし。ものとつけ。伊俳なるべ。例の内となして

いふ。ものとなりかあるこのなり。これよりはつくテアルと

いふ。暑なる何あるやはみるべし。俗言とは。

炭　月　集　冬　炭　春　猿　炭　冬

ものとあるなどいふ。「ものとつけて」の字よりつくる「ものと」

の何とかいふ。ものとつけて。ものとつけ音義のもとにもあるべし。五

十音はものとつくべきやはや

吹とうれしくなる芝とりとゆく　利牛

熱いなの湯ぬるかれる秋の月　盛水

年こや猿とまらせる猿の面　芭蕉

了の機よりあるものとつけられる片底　羽笠

うんで果てる八雪の月　利牛

うつるのうつるる虫とれば月　猪筆

うき本にきたる月のぬぐる夜　凡兆

老僧も袈裟ぬぎうる花見かな　之道

仏　食うる魚ぬぐまくり　芭蕉

炭　早乙女よ　うくとりくる　苗代の　嵐雪
猿　二階の　まくら　さしかる　秋　芭蕉
炭　切髪の　くひのこしたる　梯　野坡
猿　おすい　切る　死ぬる　ひろ　史邦
員　さのぐよ　さらさらと　宣旨が　書　荷兮
猿　ほつれる　ちの　高ぐ　ぬ　さる　凡兆
瓢　ぞ　ぬよ　すぐる　蓬　すぐず　路頭
猿　うぐひす　の　笠　ぬ　ぬる　枯　れ　芭蕉
続　笹　で　ぬ　ぬ　枯　る　つ　け　る　ぬ　ぬ　山雪
員　ぞ　う　ぬ　る　ぞ　の　ち　て　ぐ　東
炭　揚　ぐ　ぬ　よ　腫　る　足　を　抜　ぬ　ぬ　孤屋
猿　里　人　の　脚　ぬ　と　る　田　鶴　ぬ　炭雄

続　職人の　帷　る　ぬ　る　ぬ　夕　涼　上野
炭　ぞ　の　ぬ　て　ぬ　ぬ　ぐ　る　ぬ　ぬ　孤屋
猿　大年や　ぬ　の　ぬ　れ　る　ぬ　ぐ　る　羽紅
炭　神　に　医　ぬ　る　ぞ　の　土　大　根　洒堂
続　寺　の　ひ　け　る　ぬ　際　の　ぬ　ぬ　芭蕉
猿　蜀牛　ら　ら　ぐ　ぬ　る　枯　る　る　杜氏
員　ぐ　ぬ　と　ぬ　る　本　質　の　ぬ　ぬ　荷兮
続　川　秋　や　ぬ　る　ぬ　ひ　ぐ　る　栗　の　刺　芭蕉
続　ち　揚　や　ぬ　や　あ　ぐ　る　ぬ　る　鶏　ぬ　ぬ　嵐蘭
日　橙　や　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　陶拙
荒　石　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　去来
日　つ　ぬ　ぬ　下　梯子　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　傘下

□ あくるあさ ひとりそるをみる比宿　荷兮
□ 花の信 語る物 るまび 寂 外　黄鶯
□ 集れ 風 つるげる 白 展られ　野水
□ 元ゆく 明 まし たる 雨 外　一笑
□ 立 白 て 若草 みる 明 ぶ　越人
□ 土 梅や ように 生る 土筆　怒誰
炭 端 軒 よ 他 で 落る ぬるぐ ぶ　為有
荒 蔦 の 為 て ま れ ば 抜 り　牛林
猿 序 俳諧 て 蛇 の 人 の こ ん こ と　李角
の 信 言 て 夕 と ま ば こ の ま る ま ま り 即 夕 と 信 言 の ま し
こ つ ま る 句 て
炭 宮 の ま が ま て あ て は み り　利牛

続

亜 の ま れ て 帷 る 時 の ま ま い 物　里圃

言 て ま て こ て る る 引 る る る 引 る る る 俗 言 ま て こ て れ 夕 と ま の り て 言 て
て ま ま て 事 て 訳 陳 る る る か て の ば て ま て 俗 言 ま て こ て れ 夕 と ま の り て 言 て

まてり。地もまと伊達もあらぐ。宇佐なる博士。紙の表の
かりぎぬ紙の表と同じ。ぎるばかりなりぬべし。文章生に博士と
つうぬ。源氏物語などに。これ今作る。ツト出ル
なりぬ。同じ。すべくの博士。
ぬとをくるんなりとんうくはうぬぎなり

猿　い祝くとんよりられ年のくれ　路通

られて。誰が所にもあれいおとうれあれうとやんとうとして。
門ぐくいなり。をぐくみんしうくあるぎなり。この句。世にこれ世
事にいてぐらく。陸酒てにるあ事。おのれうをあり。活なり。
ゆくつもどもくその性とそ。あ。ぬぎくるぐれ
るるくくにいとぐらるなりなり

集　観音のいらう天平の花のもと　芭蕉

員　おりぬるより押あふ月と雪ぬ川　野水

荒　おくれ川ぬくりつ果ぬ木曽の秋　芭蕉

日　隅川黄つ帯迅速　傘下

○上古とつもとうつぬ天平後あり。冬のりとおりぬ川とうる
の常川重五とうあり。されど此白ぬ紙とて。上古の川とのん
とてあぐ。つもとうあくつうれりとみくうり。上古の川
き。ぬおりぬ川とぬ。ぬ川とぬ。ぬ川とぬ。ぬ川とぬ。ぬ川とぬ。
の西面とぐるとぬ何なり。此白とぬ。黒白とぬ。ぬ川とぬ。ぬ川とぬ。
川くとうのうわぐ。古ぬとぬ。上古のつもとぬ。
ぬよのんとんうぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。
つもとぬうれぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。
うぬうぬぬ。特別の例ぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。ぬとぬ。

○はるとつてく。はとつてく。はとつてく。は

[illegible]

[illegible]

[illegible]

員

日

春

員

冬

員

猿

甄

とのしかるよるの夜ぬけまの風　永泉

星霜を四月ごろ三月ばかり　野水

綾をとらいはくいとつ男ぶ代　晨

鉄の俳諧　丸水　深よめらはく　老叟

引ける半の塗こ　やれば　杜国

所にくこ千魚の如蔵ぬ　つ　洵竜

木首の砂　蕉　ゆるゆるはく　凡兆

あき　筋ち　流のつ　曲水

家のしき　ちりくとふ　ぶくすぶ　こわるぐあり

○之身

[1]

これをだ　ちりくこのしとと　世二過去ノ　ちつよもヤる志

しかしてすくする　河ちり　こし五十青の　ちゃ　ぶ

志家の　之身の　ちよひとくれど　そうぶ前の　ぶ

ぶくかくわるし　すぐく伊緒の十青く　あらふ

うちのくを　する　河ちり　さく又　作緒く　むつのあ

よちぐいちひゆくるわぐ　この俳諧　ちゃぐ　むつ

事をちつよするちつよ初ぶ　けかく過ちとのちつく

ちや端の茶かり　さりふぐくこと之身をとちる　志家の

しくちつりの　ぶ　ちやく　この之身く　脇俳の

つ例の　ぶ　ぶ

荒　廣　一　本　越　さくち　孤　芙蓉

猿　すぐ　ちや　この　庭　ちく　作　芭蕉

荒　ちつ　ぶ　西　ぶ　あの　所　野水

日　ゆふ立や口もひすまぬ郭公　松下
日　雪とみし物とさだめぬ月の曙　一笑
日　大根ほる雨よこそ〳〵　蕪の花　東延
日　夢ごろも月ハ緑のつよくり　野水
俳　あ他や紙帳まれ口の透間　曲翠
日　明月ハ星のひかれや　泥芹
荒　ひかけ〳〵底おそぐ冬枯　無日
続　封つけし文ハ書るる月の書　芭蕉
猿　わが車と鮫のにげし根芹かな　文草
員　引抜き車も猪鹿の鼾てく　野水
俳　うぐひすや鳴りてまもし春の間　沓義
炭　なく事のいとうよ出ぬ　あさぢつて　芭蕉

猿　ひとり亜ア乙し乙きのくぶち　文草
日　ぜつやかくたこまれ春の雨　芭蕉
日　うりん人こつて小沢門の蛙　文草
炭　世ごろ前の西りしらげ　利牛

冬

縁さるしげのうるみのこつて　芭蕉

前句「家ごけくかもめぐ浜ずかる男　荷ごコレラ
ミレハコレニデ人ニ坊ケラレテアハレザリシ中トレテツケ
コレラ句意　コレライトヨクオカレタリ

炭　うるう柳を今ハ角てく　俊水

俳　いく年ぞ月の人のさもものこそ　文秀
今宮盛

仙れどもうるおいざるを　さくこ　文秀

あり。いうまでもなく。俗言に夕とうつべき所を。〃とかける事。
これらにてもさるべき所。今の世のてにをはみるに。俗言の夕
をかくべきところに。〃とあり。夕とかくべきあり
き詞なく。その中にも。つるに〃なるくるめるに〃などこれにのわれ
あるなり。ひとつに。夕とうつるべきこの夕ハ〃也。うつるべき時ハ
本のやまとの歌なれども。まれに歌人。ことに蕉門に
〃とおくべし。つるに〃くるめるなどあるべきとうつべし。中にはたゞ
らんなどノアタル所モアルヽナリ　俳諧連歌の人。そのまゝにかなづかひ
のことをつゝまずあるまゝにひらがなにかゝ。いまの俗語
なれどもとかくいひやめあるまゝにこのくたりやくうつべき

俗　解ふかんをかしらや　花の友　文章
曰　みをうるくすくるうかるゝ池の鴨　沾圃

曰　腰うけはけるゝ　藤枊の　下
曰　平暉に菖蒲の葉ぬれ　支考
荒　麦蒔くに寺藁ぬれいとうぶ　景色
曰　ミのしりや　形に　燃えし月のゞ　杜若

これらの句ハ。現在のうつるべきなり。言葉の〃
さるべきなり。句にうつるべき。現在のうつるべきなり。句にうつるべ
きなり。續猿蓑に芭蕉の封つけ〃の句。五月の雨
〃句に。現在のうつるべき封のつゞくるとなれども。このむかしの句
なるべき封をつけ〃ハ。ゆゑ句のてにをはなるべきなり。〃
の字をつけ〃。これらの句ハ。その外にもかゝる句
なりとも。ゆゑにかゝるべきのことなれども。これらの〃
上の句なりとも。こゝにあるべきなれども。俗言の夕とし〃とひらく

[illegible]

○「山路すー」「川ぞそー」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegい]」「[illegい]」「[illegい

しり

この日ごろ、上る何ごとにつけてもうのくだりて行く国なり。[illegible]
さまざまにうるさきこと人まさぐりにすひろげつかねばかりなり。[illegible]
ちうどといふものの分より、信ずるかぎりの所をしがと酒ものくらふまで。
これをも問ひくもむ人あれども、ものいふことなどつゆ聞かれ
ざりけるくすむ[スミ]ばかり。けれどつゆみづからはなく、既往のあ
しき事をば、主問をとぶらひ今のありさまを為の問なり。かく既
往のうしと今こしかりつく、即その既往と今との間のあとをいうて
ひきめしとるべし。治カストハ、不言ニシテサトスヲ言ニテ、ワガ意ヲ
カレガ心ヨリ知ルベキヤウニナスヲイフナリ　かの
人まさぐりとて捨きたるみくさ奇、既往をハ人もあまたと
ものいふ。今と来たるとの方をとりのく。その中ひろうし
より出でたるその間、うくはるうしとさまたしなすいよ。
往ひが情の慈なりとうしゆ。立ちとは悔んとをうして、如ことが

情のかつをとらやるるをやるかり。なづく既往より今に一下花
にしてうるはしきうづ。此天乎波の用なり

荒　なりとなく梅一つ菊の白ぶれ　巴丈

日　こどのうちひさりうしう芋一頭　元慶

日　あげーうは梅ちりぬ[illegible]の家　後仙

いづまさ[illegible]ものごとくうけざるく。農白み字なるげ[illegible]ば。
罪とうはいづ。それだ、づまもこそのなるんなくみるべ。白元
うれとり。これはの白ごさ[illegible]ちるがごとく。既往尚今を一下郷と
いつり。これ皆その間が言葉の[illegible]新はく。この幻術こそあるべ
とうるべ。コレラ皆カノ字スミテヨムベシ

○ちうど　ちうどもしりぐなどうるべ。どどもだなどた。その寄
をうけうくもくみるべ

○咩利身

めり

この詞を今るよいて使ふるものあり。律の心律よりさて
るてふと。カルといひ。すこしねじめると。メルといふ。そのメルとふるがごく
かるより。いうとらつて。大抵そのこの心律ひとく。すこしねじめる事ある
筆昆。この詞の事なり。かるるよあれ。をかくとふるがごとく
こしひごめることを事あるんと。めりしらく。さりぐ。るりしひ
ぜくこいひごいが。すこし定められあるの用とんぐ。こと
へば。京の川紙ぐれくるがるりこいたなぐく
ともいひぐれど。十二八九を紙をすこしをかれ
わるくくめりくあるこれ紙をいるさんぐくめ。世かと
下句にてくこ紙中やこんなんとあるこ。ちうよ今いこり
今ぐなのあるく。ワが大所四ハけぐくらるもふりそぐらを。

ちくやがるうこぐくこ。ちいたるのふとくくこ。ちいた人
容めくく。ちひぐくかめて。世こ差かわぐく。ちわぐ何ようあれ。
人のうるこちりあ所くて。こくくわが性の通徹さるふられて。
よろげ言行とく。かれぐんりなくこん事ちひくく。こくとて。
事ぐくよりあくく。かりくを定めくこ時く。西くあくらくやがる
詞とかるぐこく。わぐとまはくかりくりくりあるなり。
これ祈所四この大うるのんなく。かの墓俗のあくれくこの祈さい
ぬめりくよりれく。大ふの所んやく。行くいあくこ定めくこうひう
こめりくくくれるく。これりうぐ。ちんくんなどくぐ行さ。
かるつ。ひぐくくこのく。ちくくんぐ。文章こ何めくこつ
うこ行こ。ヨムナリ 給傳くく。医者メク 女メクかどこ。このめくく
ふ行く。めこ冊めのめくく。まげ中で医者くく女くこ屋ぐれど

すべて文の医者つくるもの、ゆゑあるべかめり。
春日の〜たちのぼりけん雲の宇治のあたりにつづくなるべし。
とよみ給へるなどの時なりとぞ。集中例多し
○引かれ人かすくしてはゆくなり

○那利身

なり

このなりとぞ。来なりとぞ。人の有偏に出やるなり
なる体なり。うわくなる。あるの時ばかりなるなり。此なり
なは上のけ出たるなり。ふくなり。有偏のなりにて用ゐ
なるなりとよむべし。帰リコヌジャといふなり。この那利身のなりにて
〜多なりとよむべし。声ガスルワイといふなり。まねばかりなる
なる義。うわくひとなるとなりなる詞なるべし。くくいなるべ。なる

乃事に持あるものなるべし。ものあるなるべし。
詞なり。ものなるべ

炭　かすさぶれば中の巳刻をなるなり　智年

条白〜又たのしきなる所ぶるなり。野枝この条白〜所ぶるなり
なる人にくるなる所なるなる。麻こうけなるなる。さわぐなるべし
中巳刻なるなる。なるなる。なるなるの新なるべし今なるいのなるなるべし
いくなるなく。なるの方なるなるの。他人のなるべるなるなる
事をなるなるなる。なるなるなる。他なるなるなる
きなるなるなるなる。なるなるなる。なるなるなる
なるなるべ。なるなるなるなるなるなるなる
無なるなるなるなるなるなるなる。なる
なるなるなるなるなるなるなるなる。なる

[illegible]

古今古今とも天ぢのゞ千俳諧ともつゞめ

猿　青の月あり　苺のまこゆ　如行

炭　炭出す　野の菴かゞくなり　弧凡

日　食まに雀なくなり　文考

日　椋の実ちらく　風根ちるや　野枝

日　小ひるの時雨　雨降　牟

荒　雪乃巣　腰ひけ所　こゝひる　野水

員　ねつうゝ　ひぐりなくなり　落梧

春　濡ちぐら　のゝ　ゝあるゆき　青凡

員　ゝゝやけ　土ゝなり　飛円

流　掛杷の葉の　ゝなり　初雪　斜岩

炭　人のゝ　ゝぬ　雪ゝ舟なり　幻年

続　ゝゝ　善信のつり　ゝなり　惟然

春　くゝ　ゝ　雪　ゝ　荷子

猿　年一斗の　ゝ　ゝ　青雲

炭　吹の仕事　ゝ　ゝなり　盛水

猿　ゝ　ゝ　ゝ　虚木　氷固

続　千荷の田　ゝ　ゝ人　一鷺

員　山伏信　ゝ人　ゝ　水

続　三岩　ゝ　賀の荷　ゝ　馬莫

員　阿度　ゝ　ゝ　舟泉

集　秋　ゝ　猿　ゝ　芭蕉

瓢　芋ばかりくさ芋をかくしたるかな　弥須

○かるかれかるがるかなどかかるかすかるかるかる

支考がんてよく。病くるしみゆくとき、なんぞものよりれうるうらべし。
げ病すれとうべ。形のすこしなるかるあり。かの幻術の効すし
ぞゆくとうべ。支考がんてもけべし。られとまとわべ。一句
俳諧くに伝語りくけむ。ものいひべく。箱ふとうとてれう事有
らうかり。されど白意よりくに維伝ふとうい用べものし

○阿不身

あ

られまと紫かれべし。術結かれるかり。名ねとて用べ。あて
うに行るべ。いづまもあるからべ。不の字とつべくつりのひとり。
かの稱草草草不合命の御名かど。早このうべにく。御寿命と
いまべふとうとあ用うとれさせうもけり。御寿命のくらとうまれ
べ。これにく世用の前ひるべ。されべ世行。テ井ル二モナイ 二サヘ
ナイ かどに伝言とあるとく。たとてんとする物るの。この用のまき
さまとうに用かり。ものよりうそとあるべとあくに。けくみから
のうちふかり。ものあり。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。
ものあるうりみうあるくよかどにつくられさり。みる意。
あんふく。ものんまくかどにつくられこの用のかつうり。集中倒す

○也留身

や

これまと紫を御結くにつうり。ものるとる使とする
かどにつ用べ。紫かり。ものも。ものるうるうるかどもあるい
紫かり。ものるとなるべ。ものるかどにつけく。紫にうべ。ものうふべ
べ。他この字のやるとうに用。ものを第よ。ものるとうみるい。巴ハを
ものるとうんかり。上古にくハを世遺岡のうるうるに用かり。ほ世

[illegible]

[illegible]

猿　[illegible]　羽紅

[illegible]

○加奴身

かぬ

[illegible]

荒　かやとりの中なる切株ぶ　炊弘

月　山ゆゑ也咲うあるはしぶれ　青雲

月　一トめぐり人ふるあるかどりか　尚白

[illegible]

○かぬく　かぬ　かぬ　かぬ　かぬ　[illegible]

集　射る鈴やとりはなれの上　芭蕉

月　月ふる[illegible]湯尾やいはの祝　日

○被身

る

[illegible]

つゝて二タルのうかり。「いくそくはなつてイハレルのふかり。するうち
引るまはるかり。すぐくわざとやせんと思るゝ。都よりゝ自
然と志なくなるかり。きわぐらぶ
こゝゝ何かりゝゝぐ。ゝゝぐ。「月雨よりこゝゝ人まさゝゝゝみる
き。月の人ゝゝを自然と仕ゝゝくゝ。ゝぐんゝゝゝゝゝ。こゝ
人のゝゝあゝゝゝゝゝ

寸　うめく侍言葉。サスセルかどの詞。ゑくぼ。ゑくぼ。いと
き。流サスのんなり。わすれ草。いつく。渡サスのんなり。ゆくすゑ。
イハセルのんなり。それ詞くさりやもる歌なり。

集　吹しぐれ　石上陸奥の野ふり殿　芭蕉
同　きくの花　ものの花　同
同　桑　うゆられとさびしげやとうこ鳥　同
同　鰹ふいうるんなどそうこん　同
俳　引ふくひ　むすよ蓬くするとやさ　同
さしもせしもししもかくしてしもいづれも俳諧詞なり門の
あるかみくさ　ゑ

猿　一月ゑ来ゑ弥さしゑ　文蓋
同　弱法師わが門ゆる蓬の札　蓬角

同　ゑゆゑ　良門のぐせつくり物語　配力
ゑゑ　ゑ例ゑ　いづゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

春　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

炭　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

同　壁を　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
同　のこ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
集　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

これらの句ども四つ五つの例なり。よくくんじわるべし

む

むくろうれく。引きこまれる詞なり。掛詞なり。ろくろくこゆるごとし。上方ことばにもこれあれど。こゝに無くつりぎず。むとのこゝろのうちより。これは上のすとつゞくなるべく。サスルカなどいふこと。こゝでいわるゝはなるなどいふむかりこれどすとむとく。依經麻經のごとくいふるなり。

すしいなく。おもつぎらく。うのつぎとゆとまるとこゝ。むとく

いなく。うのつぎとゆとまるこゝ。内外のごとくあり。上方

こゝむといふく。手こゝこのゆさ方をうれるこゝ。外へつぎこゝすぎ

こゝゆこゝこゝむる者なりとこゝ

集　ゆくとりくんとやまる月　芭蕉

さ

○為身

れまこ出るなど。掛詞こゝいふて。こゝこゝ同で。こゝこゝ

で。花のうでする。こゝこゝこゝなるやゝ。わざこゝするこゝ

はあら花で。こゝ花なるこゝ。こゝこゝ

集　眉こゝ花ゆうげのして紅の色　芭蕉

日　花門の花や上戸のこゝげせん　日

日　ワがこゝ世見ノ任口上人二逢テ　こゝの花の事せこ　日

猿　さうこゝして卯花つゞ心　泉きこゝ　山川

荒　二日こゝてぬうこゝやでふ花のこゝ　芭蕉

こゝいづまこゝ例こゝく。手こゝこゝ。事を為こゝこゝ詞こゝうこゝく。

ゝを弊こゝ情を形容する詞こゝこゝ

集　やどりやしん藜の杖こゝ為ゆこゝ　芭蕉

続　白雨や中すぎしころ蟬の声　四秀

猿　月よみの塔の板廊　支考

続　昼ねしてくるのごとくやむ雨　杉風

猿　さまくるる笠かりかるる笠もなし　九兆

これらは雲かり。ふるくすぎぬ。

春　汐瓶なとりと二人ゝ酒もり　昌圭

世なる。引くのんかるゝてかり

○如身

ごと　ごとゝ。ごとくごとさよまで。よくおくこゝろつ

いり。ごとゝとみく。文章のこゝみくるり。ノヤウニヤウニアル

ノヤウナかどゝ。俗語にあるなり。これそれこゝの字と濁めぐ。異コト

別なしどのんかるは濁りくいて。濁音の字を前にもしるしが

ごとく。すべくかりの物事をなくなわぐ。即るの異コト物

をひとつとするんくかるく。音義の妙おりめべし。ふるべ歌て

ゆかりきわぐのあるべやとあるく。蒼と我くく異物かるなり。

丁ど同じかるなるべ。似くて二つ同じくまるべ。似くく。双

方共物乃持ありしるの所内のあるいからの同かり。如もちあるく

もりくく。南方を。ひとくひとかるんなり

続今歳　うの文はあるくの八幡川の岸を出れとも

なるべうぶし　支考

この如くこゝるべくと。あて俗語のまゝつゝかるは

集　つき待ちひぐんを手をもり蟬の声　芭蕉

月　月をあれば常なるのまく年の酒盛の友　日

○上古ハ、かなづかひ、いとよくあり。序、如のんなり。「うづ」なり。「まさかなるぐあり。それど如」なり。「如」なり。「別」なり。上古ハ、如ハ、つひなり。この差別ハ、古歌、勝結、こんりんなり

○八隊

○美隊

み

「ミ」ハ、「ミ」ハ、「ミ」ハ、

人ハ是非一度ハウヒニ骨ヲホドクニイタルベキ身ナレバ、肌サムシトテウレフベキニアラズヲ、猶衣ヲカサネ着ルヿヨトノ心ナリ、古人詞ニカアリシヿゴノ一句ニテモ見ツベシ

さ

これさの何ごとらつまかりなんなれどこのんれあり、みとつく、いげぎうつ出ぬとをもくチるんかり、さいく、この時くんのかりうのゆゝもらる雨をも詞るわぐ、仙るやうにくごり、たゝくべ、
ゝくゝさとらぞとゝくゝくゝさく、外より内をやく
さるんあり、ゝくゝは、内より外へけくちするんるわぐ、この頃
やゝんつぐき事かり、仙るも苦しミゝも苦しサゝもゝ、自然とこの
わりれあくうるり、上のみと、仙言のサニゝあれども、ゝゝ后のめく
さとみゝ別あり、さわぐ古言ゝ仙言といつゝ事、くりくいんぐ、
簾かゝるゝ、九詞のをくくゝやんゝゝ、経緯五十音とこの茶と知る

より外のあるまじ知り、こわあくさちべ

椽　けさ　牡丹の花の真裸　本来
荒　葉　やうのまくれぐゝき　文雛
椽　さびしさ　寂人やゝゝ　尚白
同　あくごりめ　ゝるの祝ふ　支考
同　あくれさや　青蘇　霞のゝ　摂平
同　京絵巻　ぐの月ゝ仙仲間　文章
幾　ちゝゝ　ゝの　長閑　野坡
同　門ゝ　ぐゝ　ゝ　芭蕉
同　たゝ　ゝ簾　ゝに　利牛
同　阿夫　丘尼の　祝儀　孤屋
侯　作　加減　ちぐ　夜ゝ　馬莧

同
引きとめ　芭蕉
冬
ちがうれ飯盛のごく月の雲　重五
員
旅するらのこころ可羅さ　長松
猿
口の見さ盗い庭乃蟻うれ　九兆
荒
ふしぎやれいぬさばの郭ら　傘下
続
うすき春　廚本の笑もとる無　惟然
同
自中さ年月を過り重巨燈　四本
同
雲する店のかうれ笑さか　万年
炭
ひすきつ義ふのよひのくるぶ　荊口
同
第一貝一雲の義狭のさひけぶ　脇力
猿
メがりくまどめくつきりつぶ　羽紅
炭
並杉を天けける町のありさぶ　作る

続
組て人参の根乃ふむさぶ　沽圃
同
炭ゆつ拙ふ一ふめりつさうれ　素逸
炭
人ふ名の義ふまがるれひむさぶ　野坡
同
国費尚侍町の笑さか　宕孔
続
すぐしさ年揺ふり笑をづさげる　太秀
員
ふぶしさく番井の扇乃みくの面　永原
続
ゆ云ゆは夜ふをりけふ巨燈ぶ　梅之
荒
をうけの火（松茸）なる馬あられさ　粽丸
炭
息笑ふ祇又のふくのぐるわ　盛水
同
すぐしさふ嬢くまぐる灯の枝　仰七
続
涼ゆふ牛の庵すく川乃中　万年
同
百姓ふちく世るとのぐるさふ　可見

樣　らく附のこゝろ有こと歟　炭人

月　晝眠ふ吉　芭蕉

炭　湯ずえれりぐ〳〵さと平の雪　孤屋

樣　こう爺さん　張ゆてらず不自由さよ　芭蕉

○久隊

く　くわく・つとつくく・かたつぶり・つくしの事なり・なとさわ手くいつたりこと・つくしの事なり・つくしの事なり・つくしの事なり

かし

これく仏言よ タガヨイハサテ ハテソデハアルマイカヤ ジヤハサテ
かどいつわく・やそぢうの説法はすくやんとくはくる詞かり・仏世くく
うしを寄ぐ詞くつ・ちの説法四巻くまる名より相ぐて説れる相
ツり・西行上人の歌めこうしかどい・古のかしこくろるべく・みに世
のりくとみくべ・これとくとりくる詞かくるのとくべ

荒 千観ぐ馬 教 ちかとうし 年のくれ 基角

後ぐ詞くかれくと・年くくく仏説かねば・ちくくあやんあくくつ
まくくれ・仏説くくかくよのくぐりくとかの事かり

有國曰・この所は大人のくくれつるのかり・仏説くまく仏
言のまくを用るのあるりぐ・ちくりハ自在かくぐくし・そ
うくくくと・ちくくくあく仏説とくくちぐまく事くくれぐし・
ちくかくくと・言語の道断る所の事くれ

言語よりつぐくくのくくくるぐくく・ちくも歌句くくと
益のわどくくぐもし・ちくくと仏説く仏言とくまくくは
くの自在くくいくりくくぐくくくの言語道断の所の
用くくくちかくくくくくの事あるのくくくぐ杭のあくくく
用ぐ門くかくくくくと句ハ・宮ちくくくちんかくくくくく
うくべ・くくくくくくと句ハ・鍼家の
術医くくくくぐくくくくくん・又一杭のくれくくく帷る時のかハ
めくくいくくと・ちくめくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

言葉をもつてせんなく。歌も俳諧もしらんにあらざるべきなり。俳諧は詞の自在なるゆゑなる事。古人ぶつ花あり。今の人はつゝしめぐる事なり。俗言にもあるなり。古言にもかなぶ物事なるべし。されどみな生涯えいでそつるものなるべし。されば。さにあらぬ。そもそもぶに上げむめぐ。俗にもいはるゝ。詞の者なく自在不自在と陳ずべし。

この[illegible]ハ手をのこもし。俳諧を除く。手が伝ふ[illegible]

かれめとし。寄よれく。俳諧といはるゝ。かゝみと

うゝ敬をあくべし。不自在なくして得あり。自在かゝるに失ひうんぐきる事。わゞ豊天地の行ぶかなと

かゝれき

〇奈倍隊

上古くなりぬとぐりもよあり。中昔ようなりと。にの字ホ

そもより。ふれく ヤサキニ ニアハセテ かどゝんかり。並の字れんかり。

一事のつゝ今一事のさしあくやせとくさ也。これさしたくもまで

きぬとなるくする詞とんぐし。集中例す

〇毋乃隊

すくより物なる物ハいつゝなぐぎと。御結ひ[illegible]。また

事なるもあれ。世にもてはやされぬるものは。くるめくいふ所の
詞なり。伝にもてはやすなり。オカシイ物ジヤ　イラヌ物ジヤカゴヽヽ
ヽヽ。道理ナモノ　ワケナイ　理屈ナモノ　チガヒナイヽヽカゴヽヽ伝
語にあるなり

荒集　胡ぐるまのくるくるくるくるくるくるの　荷葉

さゝぐれもくるくれぬるものや　菊葉の樹　世巻

○八多嗅

[illegible]　これく。詞の中まる上にもつる付にく。その上中にもつる付
挿頭にもくるくるく挿頭挿脚結挿みくるり。さたどこづれも。
もてこまくるいふ詞の。まめもぐりるなり上にもやはたくにく。
おのぐる上のけぐるもかるるれど。寄るもで詞なり。脚

結挿なり。セウコモナイヽヽといふんにあるもとくるれなり。は伝語の
ふくるくるくるに。すくるくるくるまくるくるくるくるくるくる

時の詞をもぐ、ハタトアタル形容なり。音義の妙なる事こゝ
べし。集中例かず

○加天隊

かて

この詞、難字にんとみるべかり。
人名、おなじくがてなどとかくこゝかどゝもるとゝ。雖の字の
つゞまり不難のんとかりかく。かてすく賦きんとかるあり。おなじく
乃倍者とかるのく。さりしくまりこれ。主ることまりこれて勝の
字のんにく。難の字をうしくまもも。すくは彼勝らもんどえく
詞どるのかり。されど字を事かるし。こゝに主用のつるれ
ど。また漢字どもの例を。つゞ國おすの詞なり。字くにも漢土
より来れるのにく。我国の詞。うるこの字をかくるにくそあれ。

このかゝ例をかり。字をまくしたりにやとされど。これを
よく考へるに。字をかり例をまるとりかるんをあやまり
をりでくるや。くゞしあるなどつゞ詞を。蓋恰の字をかく
るあり。漢土よりも来れる詞のごくく人名をつり。おなじく
字をもをくよりかく。つゞ國おすの詞かるとや。されどゆゑ
も。雖の字をとるのむあるよるどくしかくしてこゝ。かれのて
まれるにく。被勝のかり。されどゝ出がくゝをがくなとをき。
出るつゞまるのよりるまりく。出るつゞすぐるわざのやられるす
けるをとて。おなじくのかるとよりるハ。不被勝のんにく。れられ
ものどくくのるれやられるく。けのようくさ。そのすぐれるさ
のるとうん。ゞてるハ。そのかれざるゞのをとるくゞのつるもし。
イヅレモ打ニイヘル方ハ客ナリ。陰ニナリタル方ガ主ナリ。
コレニカギラヌコナガラ。ナホ心ウルタヨリニイフナリ

おなじく不勝とられたるぶかしかるべし。集中一例みえず

○かぬしがくこのわれよんべー。さそくこぐ舟のゆくべ

ごとくなどいふはらばくきめし。かてかぬくいふ。神

代紀に思兼神といふ神あり。此神く。今目前なる西の一座また

をそなへ智恵の名なり。これ兼の義なり。ちのか舟なども橋

がなどいふこがのなどいふはこのんにく。今くいまぐ所にたる

らむこともうらなども。相模ふさひとちひさしとつかり。

されど舟のうへ。ゆめくの所をちひさくすく今ゆふさど

らふなり。舟ぞとそ何ともあれ舟がゆりたとするんの負げ

てわがくるあるはのこだをなぐ。かねく。わがんりさとをいて

ゆくるあるこ。ぐくこ。船のくあゆりれぬにく。何のいづる所こと

なり。こをとくなひとりくつるべー。すべく天の波よいかく

のごくらばくこ。きこのとなりの。あくるびたてい。

古奇古今のことをしるべし。こぐらつりひさぐらぬ

なれど。ほのあくこ。たで古今の名相模とをがろく。相模とをて

こはうるのこあやふき事なり。上古くくくこれとも

びくくこくの後ど。何雅俗なるこうぐ。おのれる天の

波のくかりあり。今何雅俗出るく。ふくくこれ

をとめぐぐこなるは。今人古人よりも事なくなれ

アしいべし

皇極

俳諧天の波舟巻之六 大尾

南臺藏梓

文化四年丁卯仲冬

皇都　野田治兵衛
中川藤四郎
佐〻木總四郎
葛西市郎兵衛
橘仙堂善兵衛
柳原喜兵衛
野田七兵衛

浪華

東武